

善行に対する警告と奨励 続(2)

山上の説教の中心である「主の祈り」から

【聖書箇所】 マタイの福音書 6 章 9～13 節

ベレーシート

- 前回の説教の中で、6 章 8 節の「あなたがたの父なる神は、あなたがたが願うする先に、**あなたがたに必要なものを知っておられる**からです。」ということばの意味についてお話ししました。文脈から考えるならば、それは「**祈りにおいてあなたがたに必要なもの**」と解することができ、それが「**聖霊**」という賜物であることをお話ししました。この聖霊の助けによるならば、「異邦人のように同じことばを、ただくり返して」祈るような祈り方はしなくなるだけでなく、「主の祈り」を正しく祈ることができるのです。ですから、6 章 9 節は「だから、こう祈りなさい」で始まっています。いわば、「主の祈り」は、御霊の助けがなければ祈れない祈りなのです。しかも、神を知るための知恵と啓示の御霊は、使徒パウロが述べているように、
 - ①神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、
 - ②聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、
 - ③神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるか、
 という終末論的な祝福を理解するのを助けて下さる方なのです (エペソ 1:18～19)。

- 多くの研究者が、「山上の説教」はきわめてよく整えられた構造—「キアスムス」という文学的構造—をもっていると考えています。それによれば、以下のように分析できます(中澤啓介著「マタイの福音書注解(上)」598～599 頁参照)。

- A: 序論; 御国の民の特権(5:3～16)
- B: 主部の序; 律法を確立することの重要性(5:17～20)
- C: 御国の義; 律法の伝承の中で(5:21～48)
- D: 義のわざの最初—施し(6:1～6)
- E: 義のわざの中心—「主の祈り」(6:7～15)**
- D': 義のわざの最後—断食(6:16～18)
- C': 御国の義; 神に対する信頼の中で(6:19～7:11)
- B': 主部の結語; 律法を確立するための原理(7:12)
- A': 結論; 御国の民への招き(7:13～27)

- ここで言いたいことは、「主の祈り」が山上の説教において最も重要な位置づけがなされているということ

とであり、山上の説教のテーマが「天の御国」(神の支配)であることを指し示しているという点です。その意味からも、「主の祈り」についてじっくりと瞑想することはとても意味があります。イエシュアが神の御子としてこの世に遣わされた目的は、「天の御国」(神の王国)が近づいたことをご自身の民に知らせるためでした。それゆえ、イエシュアの語ることばも、なされる御業(奇蹟)も、すべてこの「天の御国」というテーマに基づいています。とすれば、イエシュアが弟子たちに教えられた「主の祈り」と言われる「祈り」も、その視点から解釈される必要があることは言うまでもありません。

●「主の祈り」は今日の多くのキリスト教会の礼拝において、共同体として、公に祈られている祈りです。ただし当教会(空知太栄光キリスト教会)では、あえてこの「主の祈り」を礼拝の中で祈ることをしていません。なぜなら、「主の祈り」を暗記して祈ることで、この祈りが意味していることを考えずに祈ってしまうことを危惧しているからです。機械的に、一字一句間違わないで祈ることが重要なではありません。この祈りの真意を理解して、この祈りを生きることが重要なのですが、暗記して間違えないように祈ることで、考えることなく祈る祈りになってしまっているのです。むしろ、考えて、解釈を加えて「主の祈り」を自分流のことばに言い換えて祈ったほうが良いかもしれません。そうすることで、より生きた祈りとなると考えます。そのためには、この「主の祈り」について時間を取って十分に瞑想することが必要です。しかし今回はそのことを致しません。「主の祈り」の全体を学ぶことは別の機会にしたいと思います。今回は特に、この「主の祈り」の中で私たちの多くが誤解している部分を取り上げてみたいと思います。それは「主の祈り」(9～13 節)のさらなる中心部分に当たる「**私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。**」(6:11)と訳されている部分です。

●その前に、「主の祈り」の全体を掲載し、簡単な説明をしておきたいと思います。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 6章 9～13 節

- 9 …『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。
 10 御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。
 11 私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。
 12 私たちの負いめをお赦してください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。
 13 私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。』
 【国とカと栄えは、とこしえにあなたのもものだからです。アーメン。】

●主の祈りには以下に見られる重要な御国の概念が含まれています。

- ①神を「父」としています。なぜ神を「父」と呼ぶのでしょうか。ギリシア語の「パテール」(πατήρ)という言葉には家父長的な意味合いしかありませんが、父を意味するヘブル語の「アーヴ」(אב)にはそれ以上に深い秘密が隠されています。
- ②「御名」とは、神である父が御子を通して語られたこと、なされたことなど、すべてを意味します。
- ③「御国」とは、神が支配する国のことであり、神と人とがともに住む「家」(幕屋、神殿、都)を意味します。
- ④「みこころ」とは、神がなそうとしておられるご計画と神ご自身の喜びを意味します。

- ⑤「御国が来る」とは、神と人とがともに住む神の王国(神の家)が地上に来ることを意味します。
 具体的には、キリストにあって、「天にあるもの、地にあるもののすべてがキリストにあって一つとなる」のです。とするならば、
 ⑥「主の祈り」の後半の最初にある「**私たちの日ごとの糧**」とは何を意味するのかが問題です。

1. 「日ごとの」と訳された語彙の意味

6:11 私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。

●この祈りを、私たちが毎日、口にする「日ごとのパン」「日ごとの食物」と理解するならば、イエシュアが言わんとしたことを理解したことにはなりません。イエシュアの教えの中心テーマは何よりも「天の御国」についてです。イエシュアはこのことについて私たちが関心を持つべきことを願っておられます。ですから、イエシュアはこう言われました。

「自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。・・・こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。だから、あすのための心配は無用です。

(マタイ 6:25, 32~34)

●ここに記されているのは「生存の保障」の約束です。はっきりと「自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。」とあるように、イエシュアは生存についての心配を断固退けています。むしろ私たちがなすべきことは、「神の国とその義とをまず第一に求める(原文は現在形の「求め続ける」)」ことです。とすれば、「私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。」という祈りは、私たちが毎日、口にする食べ物のことではないことが分かります。

●一見、単純に見える「主の祈り」は実は驚くべき内容を秘めています。この祈りが意味するところを正しく理解するためには「御国の福音」の概念を知ることが重要です。その概念を理解しないことには、主の祈りの全体の理解も薄っぺらなものになってしまう懸念があります。

●四つの福音書がこぞって記している「五千人の給食」の奇蹟があります。ヨハネはこの奇蹟を、イエシュアこそ旧約で預言されたメシアであることを指し示す「しるし」としています。しかし、この奇蹟を目の当たりにした群衆は「しるし」としての意味を悟りませんでした。イエシュアは多くの群衆が自分を王としようとしているのを知って、ただひとり、山に退かれました。その後も群衆は執拗にイエシュアを捜しました。そしてガリラヤ湖の向こう岸までやってきて、ついに見つけました。そのときイエ

シユアは「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです。」と群衆を皮肉っています。往々にして、私たちもイエシユアを求めるのは、自分の必要を得るためではないでしょうか。イエシユアが語ろうとしている「御国」や、神のご計画についてよりも、自分の生存の保障を求めることが何よりも優先されていないでしょうか。そのことをイエシユアは十分すぎるほど知っておられます。群衆のイエシユアを求める動機について、「いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物(パン)」のためではなく、「なくなる、朽ちるパン」を求めて、それによって満腹になることを求めていると語っています。

●ところで、「糧、パン、食物」を意味する名詞の「レヘム」(לֶחֶם)。「レヘム」(לֶחֶם)に対応するギリシア語は「アルトス」(αρτος)です。新約で最初にこのことばが登場するのはマタイの福音書 4 章 3~4 節です。「パン」にかかわるサタンとの戦いの場面で使われています。

【新改訳改訂第3版】マタイ 4 章 3~4 節

3 すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」

4 イエスは答えて言われた。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる』と書いてある。」

●イエシユアは、人が生きるために必要なパンとは、食べる食糧としてのパン(bread)ではなく、**神の口から出る一つ一つのことば**だと語っています。そのことばは、御国の福音から発せられた神のご計画であり、みこころであり、御旨、そして目的を内容とするものです。このことを教えるために、神が御子イエシユアの口を通して一つひとつのことばを発せられるのです。この意味において、主の祈りの中にある「日ごとの糧」について考えなければなりません。もしこの「日ごとの糧」のことを、生存のいのちにかかわるパンのことだと思えば、イエシユアが言おうとすることをまったく理解していないこととなります。

●「日ごと」と訳されたギリシア語の「エピウーシオス」(ἐπιούσιος)は、とても珍しい語であり、新約聖書ではここにしか使われていないのです。「日ごとの糧」(改)「必要な糧」(共)「日ごとの食物」(口)を、ヘブル語に戻すとそれは「レヘム・フッキー」(לֶחֶם חֻקִּי)となります。「フッキー」の基本形は「ホーク」(חֻק)で、神のご計画における主の定めを意味します。つまり、「レヘム・フッキー」は神が私たちに定めておられる不可欠なパンなのです。

●箴言 30 章 8 節の中にこのことばが使われています。イエシユアはこのフレーズを意識して使った可能性があります。

【新改訳改訂第3版】箴言 30 章 8 節

不信実と偽りとを私から遠ざけてください。貧しさも富も私に与えず、ただ、私に定められた分の食物で私を養ってください。 (「レヘム・フッキー」 לֶחֶם חֻקִּי)

【新共同訳】箴言 30 章 8 節

むなしいもの、偽りの言葉を／わたしから遠ざけてください。貧しくもせず、金持ちにもせず／

わたしのために定められたパンで／わたしを養ってください。

【口語訳】箴言 30 章 8 節

うそ、偽りをわたしから遠ざけ、貧しくもなく、また富みもせず、ただなくてならぬ食物で
わたしを養ってください。

●上記の「ただ、私に定められた分の食物で」(新改訳)、「わたしのために定められたパンで」(新共同訳)、「ただなくてはならぬ食物で」(口語訳)と訳されているのが「レヘム・フッキー」(לֶחֶם פִּקֵּי)です。つまり、主の祈りの中で「日ごとの糧」と訳されているフレーズです。

●マタイの「私たちの日ごとの糧」の場合には、「レヘム・フクケーヌー」(לֶחֶם פִּקֵּנוּ)と表記されます。「フクケーヌー」(פִּקֵּנוּ)という言葉が意味しているのは、「**神が私たちに定めておられる**」「**神が私たちに食べてほしいと願っておられる必要不可欠な**」パンという意味です。それは私たちにとって食べやすいものではなく、むしろ、堅い食物かもしれません。しかし、それは御国の民にとっては必要不可欠なものであり、無くてはならない「**神から受けるべきものとして定められた**」ものなのです。それは私たちが願っているものではなく、神が私たちに与えようとしているもの、神があらかじめ私たちに定めておられる大切なものです。与える主体は常に神にあります。

●要約すると、「私たちの日ごとの糧」とは「神が私たちに定めておられる必要な神のことば」のことで、霊的なサプリメントとして「私が食べたい神のことば」ではなく、神の永遠のご計画において「神から受けるべきものとして定めておられる必要不可欠なことば」なのです。それは神の永遠のご計画における御国に参与する者にとって不可欠なパン(神のことば、神の教え)であり、おそらく「堅い食物」です。「乳ばかり飲んでいる幼子」とは違って、この「堅い食物」はおとなの物です。

2. この祈りを祈る今日的必要性

●預言者のアモスは、「みことばの飢饉」が来ることを預言しました。それは神のみことばが語られていても、その真の意味を悟ることができないでいる状態のことです。そうした「みことばの飢饉」が今日の教会を襲っているのです。「まことに、まことに、あなたがたに告げます」と語られたイエシュアのことばだけが、私たちを真に生かすだけでなく、現実の中で襲いかかって来るさまざまな恐れにも打ち勝たせる唯一の力です。人間的な概念や思考ではイエシュアの語ったことばの真意を悟ることができません。隠された奥義としての神の知恵は神の御霊によって啓示されますが、それは世界の始まる前からあらかじめ定められたことなのです(1コリント 2:7)。

●ユダヤ人の指導者ニコデモも、イエシュアを神のもとから来た教師として認めながらも、イエシュアの語ることばを悟ることができませんでした。このことは、ニコデモだけでなく、神のことばを学んでいるパリサイ派の人々、また多くの群衆もそうです。たとえ彼らがイエシュアを探し求めたとしても、それは

イエシュア自身を求めていたのではなく、目に見えるパン(あるいは、いやしなどの奇蹟)を求めていたに過ぎませんでした。そのようなレベルでイエシュアとかかわっているならば、「みことばの飢饉」に襲われることは火を見るよりも明らかです。「あなたがたは確かに聞きはするが、決して悟らない。確かに見てはいるが、決してわからない。」(マタイ 13:14)のです。なぜそうなのでしょう。それは主を自ら尋ね求めることをしていないからです。「みことばの飢饉」から救われるためには、ダビデのように、主を尋ね求めることが必要です。ダビデの霊性が今日叫ばれているのはそのためなのです。

●御国がこの地に実現するとき、私たちはすでに新しい朽ちることのないからだに変えられています。したがって、地上のパンを食べることは可能ですが、必ずしもそれを必要とはしなくなります。むしろ、御国の民にとっては、神の口から出る一つ一つのことばが必要なパンとなります。そのパンとは「神のことば」です。それなしには、神との交わりを永遠に楽しむことはできないのです。それゆえ、御国の民は朽ちることのない生けるパンを神に求め続けなければならないのです。

●キリストが地上に再臨されたとき、御国がこの地上に来ます。そのときの様子を預言者イザヤが描いています。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 2 章 1～3 節

1 アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて示された先見のことば。

2 終わりの日に、【主】の家は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての国々がそこに流れて来る。

3 多くの民が来て言う。

「さあ、【主】の山、ヤコブの神の家を上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてください。

私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから【主】のことばが出るからだ。

●これはメシア王国(千年王国)における預言です。朽ちることのないからだを与えられたとしても、天からのパン、すなわち、主のみおしえ、神のことばは不可欠なのです。それゆえ御国の民たちは、主の山であるシオンに上る必要があるのです。イエシュアは「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」(マタイ 24:35)と言われました。主のことば、永遠に私たちとともにあるのです。とすれば、私たちはそれを「**きょうも**」真剣に求めなければならないのです。

●先にもふれたように、「五千人の給食」の奇蹟は、イエシュアこそ「**天から下って来た生けるパン**」であることを示唆するものでした。イエシュアは「**わたしがいのちのパンです。**」(ヨハネ 6:35)、「わたしは、天から下って来た生けるパンです。」(同 6:51)と言われました。また「それを食べると死ぬことがない。・・永遠に生きています。」(同 6:50, 51)とも言われました。さらにイエシュアは弟子たちに「**わたしには、あなたがたの知らない食物があります。**」(同 4:32)と言われました。イエシュアの弟子たちも、また多くの群衆たちも、それが意味することを悟ることができませんでした。このことは今日においても然りです。

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 6 章 26～27 節

26 イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです。」

27 なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。それぞれ、人の子があなたがたに与えるものです。この人の子を父すなわち神が認証されたからです。」

●「なくなる食物」（「朽ちる食物」とも訳されます）とは、私たちの肉体を支える食物のことです。もちろん、神は私たちがこの食物を必要としていることを、またその大切さを知っておられます。そしてその食物を必要な分だけ私たちに与えてくださる方です。しかしここでのイエシュアのことばは、「なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。」というのです。

●ここでの「働きなさい」ということばの意味は、私たちがからだのために食べる食物を得るために働かなければならないので、それと同様に、永遠のいのちに至る食物を得るために「働く」ということばが使われています。しかし、ここでの「働く」という意味は、「それを得ようと努力すること、それを得ようと熱心に主を尋ね求めること」を意味すると考えます。永遠のいのち、それは神を知り、神との親しい交わりを意味します。それを得るためにしなければならないことがあるのです。「永遠のいのちに至る食物のために働く」とは、つまり神との親しい交わりを得ようと努力すること、熱心に神を尋ね求めて、御国の奥義(神のヴィジョンに隠された秘密)を知ることです。そのためには、私たちのライフスタイルを変えることが要求されるのではないのでしょうか。そのことを知った上で、この祈りを祈る必要性があるのです。

ベアハリート

●主の祈りの中で最も誤解されている祈り、「日ごとの糧をきょうも与えたまえ」が、今日の教会において、正しく理解して祈らなければならない祈りであるということはきわめて皮肉なことです。

●最後になりましたが、「私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。」という祈りを、正しい理解の下に言い直すとしたら、どのような表現がふさわしいでしょうか。以下の表現はどうでしょうか。

**朽ちるパンではなく、私たちが受けるべきものとしてあなたが定められた、
永遠のいのちに至る天からのパン(=神のことば)を得るために、
今日も、私たちは御国を受け継ぐ者として、あなたご自身を尋ね求めます。
そして、私たちのうちにある希望について説明を求める人に対して、
いつでも弁明できるように、備えさせてください。**

2017.8.20